

聖書と文豪

シリーズ・日本人と聖書

第13回

聖書が近代文学及ぼした影響

■ 太宰治の言葉

- 「聖書一巻によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はっきりと二分されいる」

■ 聖書の言葉を題名にした書物

- 木下尚江「火の柱」・有島武郎「カインの末裔」・石川達三「風にそよぐ葦」・小山清「落穂拾い」・福永武彦「草の花」・島尾敏雄「死の棘」・宮原昭夫「誰かが触った」・大江健三郎「洪水はわが魂に及び」・阪田寛夫「土の器」……

夏目漱石(1867~1916)

- ある文学者に勧められて聖書通読を試みるも挫折した(手紙から)
- イギリス留学。教会とのつながりは？
- 「三四郎」(1908年)
 - 三四郎が惹かれた美禰子は何度も「**迷羊**」(ストレイ・シープ)という言葉投げかける
 - 結婚の決まった美禰子が三四郎に向かって「われは我が愆(とが)を知る。我が罪は常に我が前にあり。」と聞き取れないよう声でつぶやいた
 - この訳は「日本聖公会祈祷書」による

夏目漱石の聖書

- 英文聖書(改訂訳)／東北大学所蔵
 - イギリス留学に向かう船上でノット女史から贈られる(娘は聖公会の宣教師・漱石が勤めていた五高でバイブル・クラスを開く)
- 数カ所の書き込みと下線・傍線部分
 - 男と女、親と子、結婚に関わる聖句がめだつ
 - 男女や結婚をめぐる問題、そこに現れる人間の罪の問題に興味を持っていた？

太宰治(1909~48)

■ 聖書の愛読者

- 「入院中はバイブルだけを読んでいた」
- 「旅行中もただ聖書ばかりをよんでいました」

■ 聖書との出会い

- 塚本虎二(内村鑑三門下)の集会に出ていた友だちに内村の著書を贈られる
- これらの書に「ひきずり廻された」と告白
- 作品中に、福音書・使徒言行録・ロマ書・コリント書・テモテ書・創世記・出エジプト記など多数

太宰治と聖書

- しばしば登場する聖句
 - 「己を愛する如く隣人を愛せよ」(マタイ19:19)
 - 「空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず」(同6:26)
- 作品と聖書
 - 「**駈込み訴へ**」: イスカリオテ・ユダの裏切りを描いた作品
 - 「**走れメロス**」: 十字架刑・緋色の上着／「ゆるせ」と叫ぶ群衆、十字架刑を赦す王

芥川龍之介(1892~1927)

- 自殺したとき枕元に聖書一冊を置いていた
 - マタイ福音書17箇所にも傍線が引かれる
- 一高時代に聖書を手にし、教養書として読む
- 「切支丹物」と呼ばれる聖書・キリスト教・イエスに関連する小説を多く残す
 - 『煙草と悪魔』『さまよへる猶太人』『るしへる』『奉教人の死』『邪宗門』『きりしとほろ上人伝』『じゅりあの・吉助』『黒衣聖母』『南京の基督』『神神の微笑』『報恩記』『おぎん』『おしの』『糸女覚え書』『西方の人』『続西方の人』

芥川龍之介と聖書

- 殉教者たちへの興味
- 『煙草と悪魔』
 - 「南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云う事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云う事は、至極、当然な事だからである」
- 『るしへる』
 - 「悪魔亦性善なり断じて一切諸悪の根本にあらず。」
- 『さまよえる猶太人』
 - イエス・キリストに非礼を行ったために永久に地上をさまよはなければならない運命を背負わされた男

「西方の人」

- 「『エリ、エリ、ラマサバクタニ』は事実上キリストの悲鳴に過ぎない。しかしキリストはこの悲鳴のために一層我々に近づいた。」
- 「キリストの一生はみじめだった。が、彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を象徴していた。」
- 「キリスト教はあるいは滅びるであろう。少なくとも絶えず変化している。けれどもキリストの一生はいつも我々を動かすであろう。」
- 「まざまざとわたしに呼びかけてゐるキリストの姿を感じ...」(続西方の人)